

名古屋ボストン美術館 開館10周年記念

ゴーギャン展

我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか

4階ボストンギャラリー 2009年4月18日[土]～6月21日[日]
—不朽の名作、待望の日本初公開—

名古屋ボストン美術館は、米国ボストン美術館のコレクションによる展覧会を企画開催する姉妹館として1999年に開館し、2009年4月に10周年を迎えます。この節目の年に、開館以来日本での公開が待望されていたポール・ゴーギャン作《我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか》の本邦初公開になる「ゴーギャン展」を開催します。本展では、《我々はどこから来たのか》を核とし、本作を制作するに至るゴーギャンの軌跡を、ボストン美術館が所蔵する油彩画、木彫レリーフ、版画連作に、国内美術館が所蔵する作品44点でたどります。



Tompkins Collection - Arthur Gordon Tompkins Fund 36.270
©2009 Museum of Fine Arts, Boston. All rights reserved.

《我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか》1897-98年

ポール・ゴーギャン(1848-1903)は、本作について「死を前にして全精力を傾け」描いたと言葉を残しており、ゴーギャンの精神的遺言であり、彼の最高傑作とされている作品です。縦1.4メートル、幅3.75メートルの粗い画布には、右から左へと人の誕生、生、死が表現され、「どこから」「何者か」「どこへ」という表題の問いかけが暗示されていると考えられています。1936年にボストン美術館が収集して以来、アメリカ国外には二度しか貸し出されたことがなく、門外不出とされてきた同館を代表する作品です。

- [開館時間] 平日:午前10時～午後7時
土・日・祝・休日:午前10時～午後5時(入館は閉館の30分前まで)
- [休館日] 月曜日(祝日・振替休日の場合はその翌日)
- [入館料金] 一般:1,200円(1,000円)
シルバー・学生:900円(700円)
中学生以下:無料
()内は前売/団体および平日午後5時以降の割引入館料金、
シルバーは65歳以上
- [主催] 名古屋ボストン美術館、ボストン美術館、NHK名古屋放送局
- [特別協力] 東京国立近代美術館
- [共催] 中日新聞社、日本経済新聞社 [協力] タヒチ観光局、アリアンス・フランセーズ愛知フランス協会
- [協賛] 中部国際空港株式会社、東海東京証券、brother、三菱商事 中部支社

平日は午後7時まで開館

- [交通案内] JR東海道・中央本線/地下鉄名城線/
名鉄名古屋本線「金山」駅下車南口前
- [お問合せ] 〒460-0023 名古屋市中区金山町1-1-1
TEL 052-684-0101 FAX 052-684-0738
<http://www.nagoya-boston.or.jp/>

金山駅南口前

 名古屋ボストン美術館
NAGOYA / BOSTON MUSEUM OF FINE ARTS

— 自ら最高傑作になると信じた渾身の一作を描いたゴーギャンの軌跡を追う —

インディアン
「私の身体にはアメリカ先住民の、インカ人の血が流れている。[中略]
その血が私の人格の根本だ。それゆえ私は墮落した文明に、もっと自然で
野性に根差した何ものかをもって対峙しようとするのだ」(1889年)

ゴーギャンは1848年にパリで生まれ、翌年家族とともに南米ペルーに移り、幼少期を過ごしている。この異国での体験は、ゴーギャンの人格形成に深く影響を及ぼしたようだ。20代半ばにパリで株式の仲買人として働く一方、日曜画家として絵を描くようになる。ゴーギャン初期の作品(作品①)には交流をもった印象派画家たちの影響がうかがえる。

1880年代後半、ブルターニュを訪れ、印象派様式から脱却し、単純化された表現、そしてより「プリミティヴ」な造形への傾倒を強めていく。大胆に区画された平坦な色の面を用い、色彩によって自分自身の心の感情のニュアンスを表現しようとしていく(作品②、③)。



①《オスニー村の入口》
1882-83年 油彩、カンヴァス
Bequest of John T. Spaulding 48.545★



②《二人のブルターニュ女のいる風景》 1889年 油彩、カンヴァス
Gift of Harry and Mildred Remis and Robert and Ruth Remis 1976.42★



③《アリスカンの並木路、アルル》
1884年 油彩、カンヴァス
損保ジャパン東郷青児美術館蔵

ゴーギャンの初期彫刻作品を代表する作品の一点《恋せよ、さらば幸福ならん》(作品④)について、ゴーギャンは「今まで手がけた彫刻で最も出来がよく、最も変わっている。」と友人への手紙に書いている。タイトルとは裏腹に登場する人物たちの表情は苦悩を帯びており、「幸福」はどこにあるのだろうか。ゴーギャンは、視覚だけでなく観る者の感性に響く表現を求めていく。(出品の木彫レリーフ3点は、すべて日本初公開であり、本展はゴーギャンの木彫をご覧いただける貴重な機会である。)

④《恋せよ、さらば幸福ならん》
1889年 木彫、彩色
Arthur Tracy Cabot Fund 57.582★
〈日本初公開〉



⑤《かぐわしき大地》
1892年 油彩、カンヴァス
大原美術館蔵
※展示期間:5月12日~6月21日



「タヒチのプリミティヴで野性的な環境の中で、私自身が楽しむためにその芽を育てていきたい。」(1890年)

1891年ゴーギャンはタヒチへと渡った。南の島タヒチという現実、ゴーギャンの抱く西洋的な幻想が融合した世界が表現されていった。この時期を代表する作品《かぐわしき大地》(作品⑤)では、一見するとタヒチの自然の中にたたく現地女性の姿を描いた作品である。しかし、女性はヘビ(ここではトカゲ)にそそのかされ知恵の木(ここでは花)に手を伸ばす楽園のエヴァと化している。そして、ゴーギャンが魅了されたボロブドゥール寺院の彫刻に見られる人物像のポーズが取り入れられている。



⑥



⑦



⑧

⑥《ナヴェ・ナヴェ・フェヌア（かぐわしき大地）》
1893-94年 木版、ルイ・ロワ版
Bequest of W.G. Russell Allen 60.332★

⑦《ノアノア（かぐわしい）》
1893-94年 木版、ルイ・ロワ版
Bequest of W.G. Russell Allen 60.330★

⑧《テ・ポ（夜）》
1893-94年 木版、ルイ・ロワ版
Bequest of W.G. Russell Allen 60.319★

〈いずれも日本初公開〉

タヒチで制作した作品とともにフランスへ帰国したゴーギャンのバリの美術界への挑戦は、話題になったが嘲笑や軽蔑の聲が上がるものだった。ゴーギャンはタヒチでの体験を記録した『ノアノア』の執筆を始めた。その刊行のために制作した版画連作では、「楽園」タヒチで彼が追求した主題がさらに繰り返し広げられている（作品⑥、⑦、⑧）。

「今後これよりすぐれているものも、これと同様のものも決して描くことはできないと信じている」（1898年）

再びタヒチに渡ったゴーギャンは病と貧困に苦しみ、1897年12月、死を覚悟し以前から描こうと思っていた作品の制作を決める。それが《我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか》（作品⑨）である。本作には、彼が過去に描いた作品に登場した人物像、動物、また魅了されたポロブドゥール寺院の彫刻、ペルーのミラのポーズからの影響がみられる人物像が登場する。ゴーギャンは、自身の精神に強く働きかけるイメージを繰り返し登場させることによって、心の深淵に迫る神秘的な世界を表現しようとしていった。



⑨〈日本初公開〉《我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか》 1897-98年 油彩、カンヴァス Tompkins Collection-Arthur Gordon Tompkins Fund 36.270★

ゴーギャンは、彼にとっての「楽園」を求め続け、1901年マルキーズ諸島のヒヴァ・オア島へ移動する。しかし、彼に残された時間は短かった。1903年心臓発作で亡くなり、彼の遺骸は小高い山の上の墓地に葬られた。亡くなる年に描かれた作品には、その墓地の十字架が描かれていた（作品⑩）。



⑩〈日本初公開〉《女性と白馬》
1903年 油彩、カンヴァス Bequest of John T. Spaulding 48.547★

本展出品作品 全44点

ボストン美術館より

絵画5点（うち2点は日本初公開）

版画11点（うち10点は日本初公開）

木彫作品3点（すべて日本初公開）

日本国内美術館より

絵画9点、版画11点、水彩によるモノタイプ3点

彫刻2点

※期間中展示替えとなる作品があります。

【本件に関するお問い合わせ先】

名古屋ボストン美術館 広報部：那須 052-684-0752